Fukui Fine Arts Museum
福井県立美術館

2021

美術館だより

MUSEUM NEWS Vol.168

contents

〈展覧会紹介〉「写真展 オードリー・スタイル 飾らない生き方」 [2〜3]
〈イベント報告〉「写真家 水谷内健次（みずやちけんじ）の軌跡 1967−2021」展 [4〜5]
〈イベント報告〉「再興第105回日本美術院展 福井展」 [6]
令和２年度 新収蔵作品紹介 [7]
次回展覧会のお知らせ [8]
美術館喫茶室ニホ特別メニューのお知らせ
お知らせ

表紙：「戦争と平和」1956　Photononstop/AFLO

写真展 オードリー・スタイル

飾らない生き方

AUDREY HEPBURN

「麗しのサブリナ」制作時 1954　© Dennis Stock/Magnum Photos

2021年7月16日(金)＿＿8月29日(日) 会期中無休

【開館時間】午前9時～午後5時(入館は午後4時30分まで) ※7月16日(金)は午前10時～

【観　覧　料】一般1,200円(前売り・団体1,000円)、ペアチケット1,800円(前売りのみ)
高校生800円(団体600円)、小・中生500円(団体400円)

※団体は20名以上。※学生の方は学生証の提示が必要です。
※障がい者手帳等をお持ちの方とその介護者1名は半額。※未就学児は無料。
※新型コロナ感染拡大防止等のため、入場規制を行う場合や中止になる場合があります。

●前売券販売　6月16日(水)～7月15日(木)
<コンビニ端末>チケットぴあ(Pコード:685-713)、ローソン(Lコード:52849)

[主　　催] 写真展 オードリー・スタイル実行委員会(福井県立美術館、福井テレビ)
[後　　援] 福井新聞社
[企 画 協 力] クレヴィス

[お問い合わせ] 福井県立美術館　〒910-0017 福井市文京3-16-1　TEL:0776-25-0452

オードリー・ヘプバーンの飾らない生き方

1929年にベルギーで生まれたオードリー・ヘプバーン。バレリーナを夢見ていましたが、オードリーはハリウッド映画「ローマの休日」の王女に抜擢され、気品に満ちたプリンセスを可憐に演じ、スターの道を歩きはじめます。

「麗しのサブリナ」「パリの恋人」「ティファニーで朝食を」「マイ・フェア・レディ」……。女優としてはもちろんのことくるぶし丈のサブリナパンツやフラットシューズ、シンプルなブラックドレスなど、オードリーは新しい時代をリードするファッションアイコンとなり、誰もが彼女の魅力に夢中になりました。晩年はユニセフ親善大使として厳しい環境に生きる子供たちへの援助活動にも貢献しました。

女優として、女性とし、母として、ひとりの人間としてオードリーの信念ある生き方は、今も多くの人の共感を得ています。

本展では、オードリー・ヘプバーン(1929～1993)の飾らない生き方を著名な写真家の作品を中心に約130点の写真で展観します。

III

I

IV

V

II

I. ハリウッド近くのホテルにて 1953　© Bob Willoughby / mptvimages.com
II.「戦争と平和」1956　Photononstop / AFLO
III.「ローマの休日」1953　Shutterstock / AFLO
IV.「素晴らしき遺産」1951　Everett Collection / AFLO
V.「ティファニーで朝食を」1961　mptvimages.com

関連企画「見どころ解説会」 会期中土曜日 午前10時30分～約10分間
講師／当館総括学芸員 西村直樹　〈当館講堂〉　参加無料　事前申込不要(当日直接会場へ)
※新型コロナ感染拡大防止等のため、入場規制を行う場合や中止になる場合があります。※上記開催日以外にも追加開催する場合があります。※詳細はHPをご覧ください。

《イベント報告》

2021 4/23(金)▸5/30(日)

写真家 水谷内健次の軌跡 1967–2021

Kenji Mizuyachi

主催　福井県立美術館
協力　「写真家 水谷内健次の軌跡 1967–2021」展実行委員会、三谷市民文化振興財団
後援　福井新聞社

水谷内健次(1943～)

福井県立美術館では4月23日(金)から5月30日(日)まで、「写真家 水谷内健次の軌跡 1967－2021」展を開催。移りゆく自然と人間の関係を記録した写真が高く評価されている福井在住の写真家・水谷内健次の創作の全貌を回顧しました。

本展関連イベント「対談『写真家　水谷内健次の軌跡』」、「座談会『写真家　水谷内健次を語る』」等、作家の活動を検証するイベントも行われ、目標を大きく上回る6,385人の方々にご来場いただくとともに、各メディアでも大きく扱われ、沢山の反響をいただきました。

ご来場いただいた皆様にこの場を借りて、お礼申し上げます。

《関連イベント》

◉対談「写真家 水谷内健次の軌跡」

［日　時］令和3年4月25日(日) 14：00～15：50頃
［場　所］福井県立美術館講堂
［登壇者］水谷内健次氏(写真家)、
　　西村直樹(福井県立美術館総括学芸員)
［参加人数］約50名

右から、水谷内健次氏、西村直樹
約130枚の写真を投影し、対談。水谷内氏の創作の全貌を浮き彫りにした。

◉座談会「写真家 水谷内健次を語る」

［日　時］令和3年5月16日(日) 14：00～16：00頃
［場　所］福井県立美術館講堂
［登壇者］水谷内健次氏(写真家)、佐野周一氏(ジャーナリスト)、
　　髭分真二氏(アートコーディネーター)、西村直樹(福井県立美術館総括学芸員)
［参加人数］約50名

右から、佐野周一氏、髭分真二氏、水谷内健次氏、西村直樹
水谷内氏にゆかりの深い登壇者が数々のエピソードを披露。作家について語り尽くした。

水谷内健次の世界

水谷内さんとはずいぶん長いつきあいだ。いっしょに旅をしたり、飲み歩いたりしていて感じたのは、いっさいのことに声高でないということである。

「移りゆく若狭」を出版するまえ、越前や若狭の墓地風景だったが、五十枚ぐらいはあったろうか、それを見たときにも感じた。なんて写真家がいるのだろう、各地のさんまい(埋葬地)をとぼとぼ歩いてゆくひとりの男。よく写真家のことを一秒間の何分の一で勝負する、などという人もいるけれど、水谷内さんは、もともと勝負などしていない。足を運ぶ、それも多分何度もだろう、そして、その場所の春秋をとらえて帰ってくる。足といえばまことに健脚である。

「一休を歩く」「良寛を歩く」拙著二冊のために水谷内さんはいっしょに旅をしてくれた。積雪二メートルの国上山五合庵の吹雪の中を一度でへこたれた私だったが、彼はあとで三度行ったときいた。とにかく出かけるのである。そして、めぐりあった風景を、人を、花を、風を、撮って帰る。私はその写真に誘われて書くのである。二冊とも共著としたいくらいだけれど、水谷内さんは晴れがましいことをきらうのである。

水谷内さんは越前に育ち、今も福井に住んで動かない。

つまり、福井の家を杭にして、国中を走りまわって、時にはパリ、ロンドン、ニューヨークに出かけて、サッと帰ってくる。そしてそうしたことを自慢したり語ったりしないのである。

諸君は、笑うと糸のようになる水谷内さんの目をご存知だろうか。やさしいのである。そのやさしさは尋常ではないのである。はげしく主張しない。じっとのみこんで黙するのである。それがぬくいのである。
うまくいえないけれど、「送電線」では風を聞いていた。「さんまい」では心を聞いていた。つまりそんなやさしい世界なのである。

水谷内健次《金歯風》1970年代

こんど福井市の市政百周年を記念して水谷内さんの写真による「ふくいの風」が出版される由だが、まことに人を得たことと喜びにたえない。福井をはなれず、地味な仕事に命がけで走りまわる人を得たからである。

その写真の一部を見せていただいたが、あたたかいシャッターチャンスのそれぞれの景色に驚嘆した。足と辛抱の所産だと思った。

水谷内さん出版おめでとう。

1990年3月　水上 勉

虹が大きくはためく姿 —靉嘔と水谷内健次—

光のスペクトルである虹を用いた作風で広く知られている靉嘔。水谷内健次は、靉嘔の活動のほぼ全般に渡って写真を撮り続けてきた。

創造美育運動の趣旨に賛同していた若き日の靉嘔は、福井での創美セミナールや児童画公開審査会に度々参加。創美運動の主導者で福井の教師木水育男と親交があった水谷内は、1967年に靉嘔と知り合っている。

その時の様子を水谷内は、「私は24歳の時、はじめて靉嘔に会った。肩までの長髪に口髭、そしてジーンズと、当時の福井ではまず見かけることがなかったその風貌に興味をもった。彼が快活に話すニューヨークの芸術状況にも惹きつけられた。そしてなによりも靉嘔が全身から発する明るさと自由な雰囲気は、福井しか知らない私にとって魅力的・刺激的であった」と語っている。

水谷内は、靉嘔を被写体に写真を撮り始める。豊かな感性に溢れ、多様な表情を見せる靉嘔を6年もの歳月をかけて追いかけた。そして水谷内は、「靉嘔　顔」展(1973年、画廊越美館・福井)を開催する。来廊した靉嘔は、自身の幾つもの表情が斬新な視点で切り取られた写真を見て絶賛。水谷内の写真力を認め、水谷内との親交を深めていく。

靉嘔は、1982年の「靉嘔展」(フジテレビギャラリー・東京)以降、重要な展覧会やイヴェントの撮影を水谷内に依頼するようになる。著名なカメラマンたちがこぞって靉嘔作品を撮っていた中で、無名の一カメラマンを靉嘔が指名したことは当時驚きであったという。以降、様々な媒体で紹介される靉嘔の写真の多くは水谷内が撮ったものとなり、靉嘔が創作上の試行と変遷を重ねながら世界で評価されるまでの活動のほぼ全てを水谷内が撮り続けたということになる。

中でも、「300メートル レインボー・エッフェルタワー・プロジェクト」(1987年、エッフェル塔・パリ)は、靉嘔の集大成的なプロジェクトであり、“虹の芸術家”として世界から注目を集めた一大イヴェントであった。このイヴェントを水谷内がエッフェル塔最上部から撮影した“虹が大きくはためく姿”は、今も見るものに鮮烈なインパクトを与え、同時に見るものの感覚を自由に解き放してくれる、傑出した一枚となった。

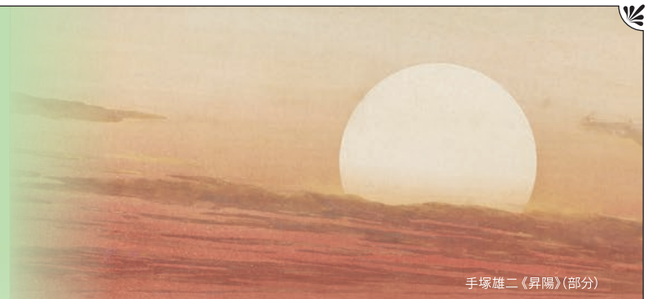
西村直樹(福井県立美術館総括学芸員)

靉嘔《300メートル レインボー・エッフェルタワー・プロジェクト(エッフェル塔、パリ)》1987年　撮影:水谷内健次

《イベント報告》

再興第105回 院展

2021 6/18(金)▸7/4(日)



手塚雄二《昇陽》(部分)

内覧会のようす

手塚特別館長ギャラリートークのようす

3年ぶりに福井で開催した日本美術院展覧会(通称『院展』)。再興第105回展にて入選した作品から選りすぐりの80点を展示しました。開幕日には手塚雄二特別館長から開会式挨拶、内覧会、ギャラリートークなどにおいて臨場感豊かに院展の魅力をお伝えしました。その中で先生は当初予定していた題材を変更し「昇陽」を描かれたと語られ、太陽の裏に大日如来の印相を描くことで、明るい未来への希望が込められているという秘話をお教えいただきました。

このように今回の院展は新型コロナウイルスの感染が広がる中で制作された作品が多数出品されていた点が特徴的でした。ギャラリートーク、講演会を通して、大きく変化する社会情勢と向き合いながら制作を続ける作家の方々の生の声を実際の作品を目の前に聞く機会に恵まれ、奥深い日本画の世界を堪能することができました。

講演会のようす

ギャラリートークのようす(谷義徳氏)

《イベント一覧》

◤ 手塚特別館長によるギャラリートーク

[日時]令和3年6月18日(金)
[講師]手塚雄二氏(日本美術院同人・業務執行理事、東京藝術大学名誉教授、福井県立美術館特別館長)
[参加人数]45名

◤ 院展作家によるギャラリートーク

[日時]令和3年6月19日(土)
[講師]荒木惠信氏(日本美術院院友、金沢美術工芸大学准教授)
片山開登氏(日本美術院研究会員、金沢美術工芸大学大学院)
[参加人数]35名

[日時]令和3年6月26日(土)
[講師]谷善徳氏(日本美術院特待)　[参加人数]20名

[日時]令和3年7月3日(土)
[講師]竹澤弘之氏(日本美術院院友、福井県出身)　[参加人数]40名

◤ 講演会「日本画制作の裏側」

[日時]令和3年6月19日(土)
[講師]荒木惠信氏(日本美術院院友、金沢美術工芸大学准教授)
片山開登氏(日本美術院研究会員、金沢美術工芸大学大学院)
[参加人数]45名

◤ 美術館学芸員　トークサロン

[日時]令和3年6月20日(日)
[場所]美術館喫茶室ニホ　[参加人数]10名

会期中 金・土・日・月には、日本画の画材にもなる天然石、ミュージアムグッズ等が当たる院展観覧記念ガチャを開催しました。

令和2年度新収蔵作品紹介

令和2年度に新しく購入・寄贈・寄託を受けた作品から今回は工芸作品9点をご紹介します。

【購入】作者不詳「青白磁渦文瓶」

1口　口径4.0 胴径17.0 底径9.5 高24.7(cm)　磁器
中国・南宋～元時代(13～14世紀)

青白磁は中国北宋時代の中・後期頃に完成した技法。本作は南宋～元代に景徳鎮で製作されたと考えられる。肩と裾には2条の沈線が巡らされ、その間を櫛描きによる渦文で埋める。底部を除く外面に青白色の透明釉をかけ焼成し、文様部分は釉薬が厚く濃い水色を呈している。青白磁は日本では「唐物」と称され、室町時代以降、富や権威を示す威信財として大切にされてきた。瓶子・梅瓶と呼ばれるこの種の器は酒器、特に神事に用いられた可能性が指摘され、奈良・談山神社等に伝世品が知られ、朝倉氏遺跡からも同様の破片が出土している。

表

裏

【購入】作者不詳「朱塗丸盆」

1枚　直径25.5 高2.0(cm)　木製漆塗
室町時代(16世紀)　【銘文】「五十枚之内／心月小方丈菓子盆／海雄叟置之」(裏面、朱漆書)

轆轤引の木地に黒漆を塗り、底部を除いて朱漆を上塗りした丸形の盆。経年摩滅により下塗りの黒漆が所々透けて見える。この種の器は「根来塗」と称され、数寄者らによって賞玩されてきた。銘文から心月寺の海雄存珠が誂えられた菓子盆であると分かる。心月寺は越前朝倉氏初代孝景が祖父教景の菩提を弔うため一乗谷に建立した曹洞宗寺院で、朝倉氏滅亡により焼亡、北庄に退転した。一乗谷時代の様子を伝える資料は希少で、本作は隆盛を忍ばせる唯一の漆芸作品である。

【購入】作者不詳「南京赤絵四方皿」

1口　縦19.2 横19.2 高4.3(cm)　磁器　色絵
中国・明～清時代(17世紀)

中国明時代末期から清時代初期(17世紀)に、景徳鎮の民窯で造られた焼き物である。本作は五彩技法によるもので、「南京赤絵」と呼びならわされた。焼物鉢や菓子皿として使用されてきたもので、四方形に松竹梅に柘榴や蘭といった吉祥モチーフを染付で描き、さらに赤や黄そして緑などで上絵を施した華やかな作品である。

【購入】作者不詳「染付桔梗蓋置」

1個　上面径7.3 底径7.9 高4.9(cm)　磁器　色絵　中国・明～清時代(17世紀)

中国明末清初に景徳鎮の民窯で造られた染付の蓋置である。染付とは、白胎土の素地に酸化コバルト(II)を原料とした絵具で絵付をし、透明釉を用いて高温焼成した陶磁器で、中国では「青花」と呼ばれる。本作は茶の湯において、釜の蓋を置くためのもので、六角形の器体の上面に6枚の花弁を描く。この意匠を秋の七草のひとつである「桔梗」の花になぞらえている。

【購入】

1 作者不詳「染付琵琶向付」

2客　各長19.7～8 幅9.8～10.0 高4.4(cm)　磁器　染付
中国・明～清時代(17世紀)

2 作者不詳「染付柘榴向付」

2客　各長16.7～17.0 幅11.5～12.2 高4.5(cm)　磁器　染付
中国・明～清時代(17世紀)

3 作者不詳「染付州浜形向付」

1客　口径14.7 底径7.4 高8.9(cm)　磁器　染付
中国・明～清時代(17世紀)

染付は「古染付」とも呼ばれ、室町時代後期には日本から日本人好みの器を注文し輸入するなど、茶の湯文化の広がりと共に豊かな発展を遂げた。向付は茶の湯の懐石で肴を盛る器として使用される器で、膳の向こうに置かれることから「向付」と呼ばれる。1は琵琶、2は柘榴をモチーフとした型作りの器、3は轆轤成形ののち州浜形に歪め、多様な文様を描く。いずれもおおらかな造形と型にはまらずのびのびとした絵付け、口縁部の釉薬の剥がれである「虫喰い」など、古染付の見所が特徴的である。

次回展覧会のお知せ

「岐阜県美術館名品展(仮称)」

[会期] 令和3年
9月18日(土)～10月31日(日)
※10月12日(火)休

岐阜県美術館は昭和57(1982)年に開館し、令和元(2019)年にリニューアルオープンしました。アーティスト日比野克彦館長のもと「美とふれあい、美と会話し、美を楽しむ」を基本理念に掲げ、近・現代の絵画・彫刻・工芸から現代美術まで、多岐にわたるアートを地域と一体となったユニークな方法で紹介しています。

この度、隣県に位置する岐阜と福井、両県交流のシンボルとして両県県立美術館の連携による展覧会を開催します。岐阜県美術館ならではのコレクション、とりわけ近現代日本画を中心に、本県初公開を含む選りすぐりの名作を一堂に公開します。

同時開催

「見せます、魅せます日本の美 〝うつくしの逸品〟」

[会期] 令和3年
9月18日(土)～10月31日(日)
※10月12日(火)休

右隻

左隻

豊かな風土と繊細な美意識のもと、優れた芸術を生み出してきた日本。時を超えて脈々と受け継がれてきた“うつくしの逸品”は美を愛する心を現代に伝えています。

本展は「岐阜県美術館名品展(仮称)」と同時開催で、福井県にゆかりのある「日本の美」をご紹介します。日本海に面し、文化の玄関口の一つとして、また交易の主要地として栄えた福井ならではの“逸品”を通して洗練された美の世界をご堪能ください。

狩野勝玉「四季山水図屏風」19世紀(江戸時代)

オードリースタイル特別メニュー
「オードリーの チョコレートケーキパフェ」

チョコレートが大好きだったオードリー。家族集まる時にはいつも決まって自らがチョコレートケーキを焼いていたという、オードリーのレシピを元に、チョコレートケーキをご用意しました。
たっぷりのクーベルチュールでしっとり焼き上げたケーキに、チョコムースやバニラアイス、パイやカカオニブを添えて、パフェ仕立てに。

美術館喫茶室 ニホ

[営業時間] 9:00～19:00
[定 休 日] 月曜日
[電話番号] 0776-43-0310
＊フリーWi-Fi
＊美術館が休館でも
定休日以外は営業

Facebook　Instagram

お知らせ

◎2021年8月～9月の休館日について

館内メンテナンス、展示替え等のため下記の日程は休館とさせていただきますのでご了承ください。
8月30日(月)～31日(火)、9月1日(水)～17日(金)

美術館のHPはこちら▶

美術館だより第168号　　本誌は再生紙を使用しています。

編 集／発 行：福井県立美術館　〒910-0017 福井市文京3丁目16-1　tel.0776-25-0452　印 刷：株式会社マツシタ　発行日：令和3年7月30日　21.07.20220